青年期における身体症状のとらわれ要因の検討

── 言語化する力に着目して ──

○桟敷瑞穂・山本　力
(就実大学大学院教育学研究科)

1.問題と目的

青年期は体と心の発達途上であり、心身共に不安定である。また、アイデンティティの確立を巡って葛藤が生じる時期とされている。文部科学省の調査によれば、平成 28 年度の不登校の児童生徒は増加傾向を示しており、約 134,000 人にのぼっている。田中(2014)は、身体的な不調を訴える不登校児童生徒は、周囲から「心身症」とは見なされず、怠けや問題行動だと捉えがちであると指摘している。五十嵐（2011）は、中学生の「精神・身体症状を伴う不登校傾向」ではコミュニケーションスキルの低さが特徴的の一つだと指摘した。

以上のことから本研究では、身体症状と自己表明する力（気持ちの言語化）との関係性をアンケート調査した。なお、身体症状に悩んでいるほど、自己表明する力が弱いと仮説をたてた。また、自己表明する上で、どのように心が動いているか調査することを目的とする。

2.方法

【対象者・調査期間】　A 県内の大学に通う大学生 297 名（男性 44 名、女性 253 名）。平均年齢 19.7 歳（SD=1.6）。2017 年 7 月に調査実施。

【質問紙】　3 つの尺度への回答を求めた。（1）Patient Health Questionnaire-15 日本語版（村松,2014 ）: 身体症状を測定する尺度。（2）自己表明尺度（柴田,2001）: 友人にどの程度自己表明できるか測定する尺度。「意見の表明」「喜び・感謝の表明」「限界の表明」「断りの表明」の 4 因子で構成。（3）アサーションの心理的要因尺度（柴田,2004）: 自己表明を行う際の心的状態を測定する尺度。「安心感」「配慮」「素直さへの肯定感」「スキル不安」「支配欲求」の 5 因子で構成。

3.結果と考察

身体症状の得点分布を figure1 に示した。仮説を検討するため PHQ-15、自己表明及び心理的要因間の相関分析を行った（Table1）。

PHQ とスキル不安との間には低い正の相関がみられた(r=.38，p＜.01)。スキル不安とは「自分の気持ちを友人にうまく言えない」ことを示している。このことを踏まえると、気持ちや意志を言語化できないほど身体症状を訴える傾向があるとみなすことができる。つまり、*自身の感じているストレスを言語で伝えるのではなく、代わりに身体化となって現れていると解釈できる。*

自己表明と素直さへの肯定感との間には中程度の相関がみられた(r=.55，p＜.01)。自身の意見に肯定的であることと、自己表明する力が強くなることの間には相関があるとみなせる。

一方で、自己表明とスキル不安の間には中程度の負の相関がみられた(r=-.41，p＜.01)。意見の交わすことへの戸惑いが自己表明する力を弱めるとみなすことができる。

今回の研究では言語化する力として自己表明に着目したが、青年期の言語化する力の定義は難しい。しかし、自分の考えをうまく言えないことと身体症状との間にはつながりがあると考えられる。

4.残された課題

今回の研究では、PHQ と自己表明尺度との間に相関はみられなかったが、自己表明と関連する下位尺度との間には弱い正の相関がみられた。したがって、仮説は部分的に支持された。今後は、使用する尺度のさらなる検討が必要である。また、「気持ちの言語化」を測定する新たな尺度構成も必要ではないかと考えられる。

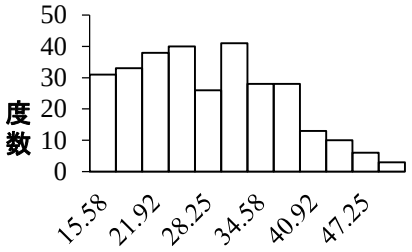

Figure1　PHQの分布

Table1　PHQ−15、自己表明及び心理的要因感の相関分析

	PHQ	自己表明	安心	配慮	肯定感	スキル不安	支配	Mean	SD
PHQ	—	-.102 +	.085	.063	-.134 *	.379 **	.087	28.29	8.7
自己表明		—	.199 **	.045	.545 **	-.412 **	-.118 *	57.64	7.3
安心感			—	.285 **	.262 **	-.003	.224 **	22.12	2.3
配慮				—	.271 **	.204 **	-.260 **	19.63	2.8
肯定感					—	-.207 **	-.133 *	20.67	2.4
スキル不安						—	.125 *	8.41	2.3
支配							—	5.3	1.7

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$
ピアソンの相関係数